

# 喜多村和之先生を偲ぶ

— 経歴, 業績, 学風, RIHE への貢献 —

有本 章\*

## はじめに

喜多村和之先生が2013年12月25日に享年77歳でご逝去された。訃報に接して深い悲しみに襲われた。先生は高等教育研究の第1人者として斯界を長年牽引されてきたことは周知の通りであるが、しかしあまりに早く他界されたことはとても残念である。先生は、広島大学に18年間勤務され、広島大学大学教育研究センター（現、広島大学高等教育研究開発センター）の発展に尽力された功労者である。そのことから、センターOBの私に与えられた役割は広島時代の先生のご業績や学風について、私の個人的な思い出を含めて追悼させていただくことであると考えている次第である。

## 1. 経歴

先生は、1936年に東京都で生まれ、早稲田大学文学部卒業、東京都立大学大学院中退、国立国会図書館勤務を経て、広島大学教授、放送教育開発センター教授、国立政策研究所研究部長、早稲田大学客員教授（文学研究科）を歴任された。広島大学名誉教授でもある。専門は、大学論・高等教育論。学位は博士（人間科学、大阪大学）。（これは先生が1999年3月時点に自ら書かれた内容を踏まえたご経歴である。）

### 【広島大学の経歴の概要】

広島時代のご経歴を紐解くと、次のようになる。

- ・1972年4月1日 文部教官 広島大学教育学部助教授に採用
- ・1972年5月1日 広島大学大学教育研究センター助教授に配置換
- ・1979年3月1日 広島大学大学教育研究センター教授に昇任
- ・1990年4月1日 放送教育開発センター研究開発部教授に配置換
- ・1995年5月23日 広島大学名誉教授の称号授与

こうしたご経歴からも明白なように、1972年4月に教育学部助教授として着任された。その1ヶ月後の5月1日に大学教育研究センター発足と同時に助教授として配置換えとなった。センターは日本の高等教育研究センターとしては草分けであるから、その舵取り役として招聘され、国立国会図書館の仕事から転身されて、新ポストに就任された。このことは喜多村先生について語る場合には

---

\*くらしき作陽大学学長顧問／高等教育研究センター所長／広島大学名誉教授

特筆すべき事柄であると思われるので、その点については後述したい。その後、1979年に教授に昇任された。センターへは36歳の時に着任され18年間在籍されたのちに、1990年に54歳の時に放送教育研究センターへ転出された。アカデミック・キャリアの中では最盛期に在籍されたことはセンターにとって幸運であった。なお、従来からの業績や著書を集大成した学位請求論文『現代高等教育論』により、平成6年に大阪大学より博士学位（人間科学）を授与されておられる。

### 【広島大学における功績】

喜多村先生のセンターでの業績は、論文や著書の公表において真骨頂があるので、それは後述するとして、まずはそれと表裏の関係にある種々の業績について言及しておきたい。1970年前後は、大学改革の嵐が国内外で吹き荒れた時期であったし、古い大学から新しい大学への転換期を迎えていた。その時点でセンターが創設されたのは、画期的な出来事であった。そして、先生は我が国において大学改革に必要な重要機能であるにも関わらず全く未整備であった高等教育に関する政策の形成、研究体制や学会などの基盤づくり及び人材養成の面で多大の貢献をなされた。大学研究はいまだタブーの時代であり、大学を研究する学者はほんの一握りの人々であったし、総じて一種の「変人」とみなされる雰囲気や漂っていた時代に、この荒野にメスを入れて研究することは、並み大抵の覚悟では出来ないものがあつたと言つて過言ではあるまい。

センターに着任以来、研究活動及び大学院の授業（修士・博士課程）など教育面にも従事するとともに、同センターの定員を創設当初の助教授1名から基礎部門、大学教育研究部門及び大学制度・政策部門の3講座に拡大するなど、その基礎を築くことに尽力された。それは、正確には当時の歴代センター長であった前川力、横尾壮英、丸山益輝、稲賀敬二、新堀通也、畑博行、関正夫の各先生と共に行われたのであるが、それでも高等教育研究を牽引された先生の比重が大きかったように思われる。とりわけ、先生の業績として注目すべきは、同センター研究員集会の開催、OECD及びUNESCO等の国際機関との国際会議の開催等を通じて、国内のみならず国外の大学・高等教育研究の人的ネットワークの構築に鋭意努められたことである。センターが誇る研究員集会は、1996年に日本高等教育学会が設置されるまでは20年以上にわたつて学会の役割を果たしたし、日本の高等教育研究の方向性を見定めるために指針を提供する役割を一手に担った。現在のように、各種学会やコンソシアムが叢生し、分立して、高等教育研究の機能的分散が生じているのとは違って、全国の高等教育研究者が一堂に会して共通の問題意識を温めた意義はきわめて大きいものであつた。

国外の高等教育研究者との人的ネットワークの構築には、先生のご活躍を抜きにはそれを語れないほど貢献が大きく、クラーク・カー、マーチン・トロウ、バートン・クラーク、ハロルド・パーキン、ヘンリー・ロソフスキー、フィリップ・アルトバック、ウルリッヒ・タイヒラー、ウィリアム・カミングスなど著名な学者を次々と招いて、国際セミナーを開催されたのである。先生自身はのちに当時を回想して学内的には「高層圏飛行」とか「セミナー屋」などと悪評紛々であつたと述懐されていたが、そのような空気がある中でも高い志を抱きセンターがfor Hiroshima Universityではなくat Hiroshima Universityであることを身を以て推進されたわけである。

喜多村先生は、図書室の整備にも率先して指導性を発揮され、自ら選書をされ、目配りをされ、

内外の良質の著書や資料を収集された。こうした教育関係の情報・資料の収集に対する尽力によって、この分野では国際レベルの情報センターとして国内外からその存在価値を大きく評価される組織にまで高めた。センターから東京などへ転出したOBたちが、赴任先では情報・資料に不自由であると嘆くさまを何度も見聞した。

この間、先生は、1972年4月から同73年5月まで広島大学将来計画特別委員会大学院・研究体制問題小委員会委員として同大学の大学院博士課程の設置及び研究体制の整備改革に携わり、高等教育の基盤づくりに貢献された。また、大学院地域研究研究科、大学院法学研究科、大学院経済学研究科の修士課程を改組し1986年（昭和61年）4月に設置された大学院社会科学研究科（法律学専攻、経済学専攻、国際社会論専攻）においては、大学・高等教育の分野では日本で最初となる高等教育専門の研究科博士課程国際社会論専攻「比較大学制度論」科目を担当し、高等教育研究者の養成や大学職員の育成に貢献されたのである。

### 【広島大学以外の功績】

先生は、1983年（昭和58年）2月から同87年9月まで文部省大学設置審議会委員（短期大学基準分科会）、1989年（平成元年）10月から同92年9月まで文部省大学審議会特別委員を務め、日本の高等教育政策の形成過程に参画して、社会の変化等に対応した高等教育の質的充実、高等教育機関の地域間格差の是正等について尽力された。

同人は、下記のような活動を通して、高等教育研究に関する国際学術交流に大きく貢献されたことも注目し得る。1984-85年には、フルブライトプログラムの助成をうけ、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員として留学し、UCLA、ミネソタ大学、ニューヨーク大学等々の諸大学で教育や研究活動に従事された。1987年には中国の厦門大学、復旦大学、南京大学、北京大学への講義に招聘され、さらに韓国の教育開発科学院の国際会議に招聘され発表を行った。1973年以来OECDの国際会議にしばしば出席し、日本の高等教育研究の代表者として2回にわたり研究発表を行い、その成果はOECDの国際誌に発表された。

1990年に広島大学から放送教育開発センター教授へ移り、その後には国立教育研究所教育政策研究部長等を経て日本私立大学協会附置私学高等教育研究所主幹や早稲田大学特任教授（教育学部）の要職を務められて活躍された。特に早稲田大学では、多くの院生の指導に当たられ優秀な人材を育成されたので、母校に大きな恩恵をもたらされたと思う。

## 2. 業績

学術研究の面では、日本教育社会学会、日本比較教育学会、日本教育行政学会、アメリカ学会等に属し、日本において未開拓の分野である大学・高等教育の制度、機能・構造を、歴史的方法と比較的方法の面からアプローチし、比較高等教育論の理論と体系化に努められた。上記のように、これまでの業績や著書を集大成した学位請求論文『現代高等教育論』により、1995年（平成6年）に大阪大学より博士学位（人間科学）を授与された。

また、共同研究としては、OECDとの国際共同研究「大学の組織運営（IMHE）に関する総合的研究」、「大学院の現状と将来に関する調査研究」（科研）、「大学の国際化に関する総合的研究」（フォード財団，科研）、「欧米における大学設置及び大学評価システムの研究調査」（海外学術科研）、「大学院・学位制度の革新に関する調査研究」（科研）、「学校淘汰および高等教育機関の新設・統廃合に関する比較社会学的研究」（科研）、「日本人の国際化に関する研究」（日本生命財団助成）などの共同研究を遂行し、それぞれ学界に成果を発表して顕著な功績をあげられている。

先生は、早稲田大学第一文学部哲学科卒業の経歴どおりに、哲学者としての自己像を確立されたと拝察している。実際、途中から転身されて生涯にわたって精魂を傾注された高等教育研究においては、哲学的方法論に依拠しつつ、持ち前の豊かな学識に裏打ちされた、どちらかと言えば巨視的なアプローチを展開され、主に米国の高等教育研究を視座の焦点に据えて、縦軸の歴史的アプローチと横軸の比較的アプローチを結合させて、数多くの著作を世に送られたのである。著作は単著、編著、訳書、論文など多岐にわたり、多数に上っているが、その中で単著、編著、訳書の主なものを列挙してみると次のようになる。

#### 【単著】

- 『カーネギー高等教育審議会—その業績と評価』（民主教育協会，1976）
- 『誰のための大学か』（日本経済新聞社，1980）
- 『大学教育の国際化—外からみた日本の大学』（玉川大学出版部，1984）
- 『学生消費者の時代』（リクルート出版部，1986）
- 『高等教育の比較的考察—大学制度と中等後教育のシステム化』（玉川大学出版部，1986）
- 『大学教育の国際化（増補版）』（玉川大学出版部，1989）
- 『大学淘汰の時代—消費社会の高等教育』（中央公論社，1990）
- 『大学評価とは何か—アクレディテーションの理論と実際』（東信堂，1992）
- 『現代アメリカ高等教育論』（東信堂）『アメリカの教育—万人のための教育の夢』（弘文堂，1992）
- 『現代アメリカ高等教育論—1960年代から1990年代へ』（東信堂，1994）
- 『人は学ぶことができるか—教師と弟子』（玉川大学出版部，1995）
- 『現代高等教育論—歴史的比較的考察』（玉川大学出版部，1995）
- 『現代の大学・高等教育—教育の制度と機能』（玉川大学出版部，1999）
- 『現代大学の変革と政策—歴史的・比較的考察』（玉川大学出版部，2001）
- 『大学は生まれ変わるか—国際化する大学評価のなかで』（中公公論新社，2002）

#### 【編著・共編著】

- 『Changes in the Japanese University』（Praeger Publishers，1979）
- 『教育は「危機」か—日本とアメリカの対話』（共著，有信堂，1987）
- 『大学教育とは何か』（玉川大学出版部，1988）

『大学授業の研究』（共著，玉川大学出版部，1989）

『大学院の研究』（共著，玉川大学出版部，1995）

『高等教育と政策評価』（玉川大学出版部，2000）

## 【訳書】

Columbia大学紛争事実調査委員会『コロンビア大学の危機—コックス・レポート（東京大学出版会，1970）

M. トロウ『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』（共訳，東京大学出版会，1976）

ロンドン大学大学教授法研究部『大学教授法入門』（共編訳，玉川大学出版部，1982）

D. リースマン『高等教育論—学生消費者主義時代の大学』（共訳，玉川大学出版部，1986）

J.ヘファリン『大学教育改革のダイナミクス』（共訳，玉川大学出版部，1987）

D.W.スチュワートほか『学歴産業—学位の信用をいかに守るか』（共訳，玉川大学出版部，1990）

P. アルトバック『政治のなかの学生—国際比較の視点から』（東京大学出版会，1971）

E.L.ボイヤー『アメリカの大学・カレッジ—大学教育改革への提言』（共訳，玉川大学出版部，1996）

H.R. ケルズ『大学評価の理論と実際—自己点検・評価ハンドブック』（共訳，玉川大学出版部，1998）

C.カー『アメリカ高等教育 試練の時代—1990 - 2010年』（監訳，玉川大学出版部，1998）

C.カー『アメリカ高等教育の歴史と未来—21世紀への展望』（監訳，玉川大学出版部，1998）

M. トロウ『高度情報社会の大学』（編訳，玉川大学出版部，2000）

単著には『誰のための大学か』、『高等教育の比較的考察』、『大学教育の国際化』、『大学淘汰の時代』、『大学評価とは何か』、『現代アメリカ高等教育論』、『現代高等教育論』などがあり，編著には『大学教育とは何か』、『大学院の研究』などがあり，訳書にはマーチン・トロウ『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』はじめ多くの出版が見られる。これらの書物はいずれをとっても斯界をリードする，深い洞察力と先見性を宿した名著である。なぜならば，私見では種々の理由がその事実を裏書するに違いないからである。

第1に，単著のすべてが現代の高等教育や大学に焦点を合わせて，歴史的かつ比較的に考察されたものであり，現在を対象にしながらも，その依って来る原因を追究し，未来への予告や警告を鋭く提言しているところに特色が発揮されている。現在の日本の大学に根強く存在する社会に対する閉鎖性を打開することが主題となっている。歴史比較的に縦軸と横軸を組み合わせ，縦糸と横糸を織りなして，どちらかと言えば虫瞰図的よりも鳥瞰図的に高等教育や大学の現在を基軸にして過去，現在，未来を考察する手法がいかに採用されているのである。

そのことは，単著や編著に限らず訳書にも該当する。外国の書物を翻訳する場合にも，日本の現実を大局的な視座から歴史的かつ比較的に洞察する視点がなければ単なる翻訳に終わってしまう。



その点、訳書にはアルトバック『歴史のなかの学生』、トロウ『高学歴社会の大学』、ボイヤー『アメリカの大学・カレッジ』、カー『アメリカ高等教育の歴史と未来』など多数がある中で、日本の大学の将来を占ううえでも欠かせない重要な原書が選ばれているのである。

これらの著作にも窺われるごとく、歴史といっても過去に比重をおくよりも現在を見据えて未来を展望する方向で洞察力を発揮され、比較といっても米国に比重を置くよりも日本を見据えた改革方向で洞察力が発揮されている。我々の世代では、研究者としてマイクロではなくマクロの勉強を先にするべしとの指導を受けたが、そのような観点からの研究の典型がそこには窺われるように思う。

第2に、関心が現在の問題に焦点化されていることも特徴である。このことは第1で述べた点と矛盾するように見えるかもしれないが、必ずしもそうではない。現在の日本の高等教育を対象に問題点や課題を分析することを主題に置き、そのためには主に米国の先行研究を重視する手法を駆使して、特に大学教育の現状に対する批判的な考察が随所に展開されているとみなされる。ちょうど1960年代から70年代は高等教育の大衆化が進行し教育爆発が生じた反面、さまざまな矛盾が噴出した結果、学生が大学の時代錯誤を糾弾し、世界的に「大学紛争」が続発し大学改革の時代に突入し、とりわけ大学教育の改革が焦眉の急を告げる状況が出現したことも、そのような問題意識に拍車をかけたのであろう。大学紛争に関する訳書『コロンビア大学の危機』はその証左の一端をしめすのである。米国との比較の中で日本を凝視する眼差しがそこに見られるのである。

しかしながら、実際に日本の高等教育政策の中で大学教育の改革が本格的に動き始めたのは、1980年代の後半の臨教審の設置にはじまり、1991年の大学審答申以後であるから、すでに政策に先行して問題意識や研究が深まっていたことが分かる。現在でこそ授業改革は大学教育改革の焦点になっているが、『大学教育とは何か』、『大学授業の研究』、『大学授業法入門』、あるいは『大学教育改革のダイナミックス』、『アメリカの大学・カレッジ—大学教育改革への提言』などは、四半世紀以前という早い時期からその問題に切り込んだ労作であることに、そのことが裏書きされている。

第3に、早いと言え、現在は全国的に私立大学を中心に大学の定員割れが4割以上に達して、一種の社会問題化しているのであるが、このような事態が起こる可能性をシミュレーションによって予告したのは、これも四半世紀以前に出版された『大学淘汰の時代』という警告の書であった。大学の量的拡大は、やがて頂点を過ぎると淘汰の時代を迎えることは回避できないのかもしれないとしても、出版されたのは量的拡大の最中であった。その点、米国の先例を踏まえながら、日本での大学淘汰を予測し、大学が絶頂期にある時期にしのびよる危機を予言して、それに対応した改革の必要性を分析した、「転ばぬ先の杖」であった。量の繁栄は質の保証を問うことと裏腹の関係を秘めていることは言うまでもない以上、大学の質保証は重要な課題であった。

しかし警告があまりに早すぎて、現在では忘れ去られてしまい、これから大学倒産という本番の危機の時代に突入する時点では、十分な効力を発揮していないのではないか。世に「過ぎたるは及ばざるがごとし」の格言があるごとく、何事も遅過ぎるのも早過ぎるのも問題がある。後知恵的にはこの点は残念である。

目先ではなく中長期の展望や予言は一般に受け入れられるとは限らないし、むしろ時期尚早に陥る場合が少なくない。その点、広島大学で種々の研究会を通じて各種の提案をされた先生は、それ

らの多くは政策的な提言を含んでいたにもかかわらず、あまり傾聴されなかったと東京へ出発する時点で慨嘆し失望して旅立たれた。センターでの提言や研究は大体4～5年後に文部科学省において政策化されることが多かったが、同じ内容でも政策となった段階ではそれに同調する風潮が生じることも嘆かれていた。

第4に、教育の問題と裏腹の関係にあるが、教育や研究の質を問題にする視点から大学評価の改革を追求する姿勢が旺盛であったことを指摘できよう。主たる業績は『大学評価とは何か』、『大学は生まれ変わるか』、『大学評価の理論と実際』などである。日本では2000年以後にアクレディテーション改革、機関別認証評価の制度化が開始されたことを想起すると、評価の必要性を強調する著作はかなり早い段階の仕掛けであった。

第5に、業績の特徴は学生に照準した著作が重きをなしていることが一つの特徴である。「大学教育とは何か」を問うことは、その中核に学生が存在することを抜きに問えないから、学生に照準することは当然と言えば当然の帰結である。『誰のための大学か』あるいは『学生消費者の時代』はその角度から現代の大学の時代錯誤に陥っている状態を批判的に論じている。前者は1980年に書かれた著書だが、すでにエリート主義型、平等主義型、社会福祉型の高等教育観の中で最初の型から最後の型への転換を唱導し、「人間を非個人的に選別・配分する機能から、多彩な個性の可能性をひらく本来の教育機能の回復こそ、今何よりも求められている」という熱い論調がみられる。エリート時代後に到来する大衆化時代、あるいはユニバーサル化時代を読み込んで大学教育改革の必要性を追求しているのである。学生に照準してその不本意さを論じることが、教師の不甲斐なさを論じることと符合する。大学教授職や大学教師など特に大学教員を主たる対象とした著作はみられないが、学生問題は教員問題と表裏の関係にあると意識されていたことは疑えないであろう。リースマンとの出会いの著『人は学ぶことができるか—教師と弟子』やその著の訳書『高等教育論—学生消費者主義時代の大学』などにはそのことが読み取れる。

第6に、大学の国際化があまりに立ち遅れた状態にあることを憂慮して、警鐘を鳴らし、大学の鎖国から開国を熱心に唱導されたのも注目すべきである。『大学教育の国際化』はその結晶である。外国人教員の雇用が少ないことを問題にした本書は30年前の出版であり、今日でも大学の国際化がはかばかしくなく同様の状況が存在する以上、出版と現実との間に横たわるギャップが大きいことを痛感せざるを得ない。遅ればせながら現在、グローバル化時代を迎え、大学のグローバル化が俄かに脚光を浴びる情勢を迎えているのであるが、表面的にしかも国家主導によって画一的に急ぐのではなく、地道に着実に国際化を基軸とした歩みを行うことの大切さと必要性を唱えた高説に学ばなければならない。

以上の特色は、私が独断と偏見でもって列挙した理由であるから、正鵠を射ているとは言えないかもしれないし、他にも特色があるに違いないとしても、また様々な切り口から業績を論じられるとしても、これらの一連の業績は何よりも深い先見性を有していることは明白である。それは歴史のかつ比較的研究に基づく高等教育の現実に対する洞察力と分析力に由来していると考えられる。

### 3. 学風

マーチン・トロウ、クラーク・カー、アーネスト・ボイヤール、フィリップ・アルトバックなどの所論をいち早く咀嚼し紹介する仕事は、先生独特のすぐれた着眼点であったし、しかも時宜を逸せず絶妙のタイミングで研究され紹介された。トロウ・モデルは天野郁夫先生と共同で紹介され、日本の学界を席卷し、一世を風靡した。あまりに影響が大きいために、日本の学界では世界的にはその他のモデルが存在しないかのごとき空気が支配したのではないかと回想できるほどである。特にトロウの歴史・構造を軸にしたアナログ・モデルが支配的であったこの時期には、日本の大学格差は是正されるどころか拡大した。確かにトロウ・モデルは大衆化やユニバーサル化や万人の教育など日本の大学の社会に対する閉鎖性を開放する方向へは有効な理論であったし、その点は上記のように喜多村先生の貢献である。

しかし米国のように開放的な階層構造ではなく閉鎖的な階層構造を戦前以来形成してきた日本の大学では、旧制専門学校の末裔の私立大学が受け皿になって大衆化を促進したにもかかわらず、戦前以来形成された閉鎖的な階層構造はむしろ拡大した。エリート時代のエリート大学は大衆化やユニバーサル化段階において解消されたのではなく、エリート大学として再生産されているのである。米国を基盤に構築されたトロウの図式では、それは当然の帰結であっても不思議ではない。日本の格差拡大は米国と日本の構造の違いに起因する。私見では、その点にメスを入れないアナログ・モデルの方法論に限界があるのに対して、その点にメスを入れる知識社会学や科学社会学に由来する知識モデルを軸にしたデジタル・モデルは有効であるにもかかわらず、歴史=構造や制度よりも知識、学問、ディシプリンからのアプローチに対してあまり注意が払われたようには見えない。また、そのような方法論は高等教育論構築にも関係が深く、長所がある反面で限界があろう。

それはそれとして、多数の訳書には、原書をいち早く読破され、日本へ輸入して広める役割を率先して果たされた学風が刻印されている。とりわけ『高等教育の比較的考察』『現代アメリカ高等教育論』『現代高等教育論』『現代の大学・高等教育』などは、アカデミック・キャリアの後半に出版されたものであり、その意味で従来の高等教育研究を集大成する性格を秘めていると解される。これらの中では特に1990年代に書かれた最後の著書は、学位論文を基にしており、1980年代に書かれた最初の著書の論点を踏襲し、再構築している点で、長年の研究の集大成の業績である。したがって、1970年代から書き始めて以来の長年の学究生活を通じて一貫して何が主たる関心であったかは、章立てにも具現されていることになる。その意味からすると、主たる骨格は高等教育の制度と機能であり、制度は高等教育の制度概念、段階移行、構造、システム化など、機能は教育機能、一般教育、補習、大学院教育、そして大学評価などに存在する。これらに一貫した関心の焦点は生きた高等教育論の構築である。著者自身の言葉を借りれば、高等教育の社会的価値や必要性への関心であり、「大学はどこから来てどこへ行くのか」「何のための高等教育研究なのか」が終始問われているのである。

実際、これらの書物は日米比較を中心に米国の先導性をいち早く摂取しながら、日本の現状分析によって将来への展開を誰よりも先んじて行っていたいわば指南書である。上で紹介した翻訳書の数々



も米国の場合が殆どであるが、いずれの場合も米国の先進性と日本の後進性を合わせ鏡として考察している点に特色がある。このような学風は誰にでも樹立できるものではない。その点を「風見鶏」だと批判的に陰口を言う研究者も当時はなきにしもあらずであったが、横のものを縦にするのは日本の学者が大なり小なり陥る傾向がある中で、誰よりも大胆に先進的にそれを行ったのは、研究の関心が単なる関心に終わらないために与えられた喜多村先生の類まれなる天賦の才能であり、誰にも真似のできないお家芸であり固有性であった。

それにつけても、現在は米国の先端性を十分咀嚼して日本の現状に応用できる研究者があまり見当たらないのではなかろうか。このことを勘案すると、喜多村先生の偉大さが今更ながら偲ばれるのではあるまいか。日本の学界は、理系と文系ではかなり異なるように見える。理系は世界共通の土俵に立って、英語で論文を書くのが通常のスタイルであるのに対して、文系は日本独自の土俵や市場が確立されているので、世界共通の土俵に立って英語で論文を書かなくてもそれほど困ることはないだろう。その点、2003年以来急浮上した「世界大学ランキング」は理系の世界には通用しても、文系の世界には通用しない傾向があっても不思議ではなかろう。しかし、日本の学界の中だけに籠るとガラパゴス化して世界から孤立し見放される危惧が多分にあることも否めない。そのようことを意識されたかどうか定かではないが、喜多村先生はいちはやく国際化を唱導され、センターを世界的研究網の一角に食い込ませる努力を率先的になされたことは指摘できることであろう。そのことは、文学部で哲学を専攻して涵養された巨視的かつ鳥瞰図的な方法に裏打ちされた深い学識が、高等教育研究の発展をリードしなければならない制度的使命を課されたRIHEにおいてみごとに開花し、高等教育研究に哲学的アプローチとして縦横無尽に援用されて、幅広くしかも深い考察を展開することができたのではあるまいか。

#### 4. RIHEへの貢献

私は、1960年の安保の年に入学し、1969年の再び安保の年に大学院を終了したので、その間に必然的に大学問題に関心を高め、大学の卒論では大学入試制度について書き、大学院の博士課程では大学論を研究していたこともあって、当該課程終了後に務めた教育学部助手の時に学内公募された大学問題調査室に応募した。採用され1年勤務した後に大阪教育大学へ転出したが、その翌年の1972年に大学教育研究センターが創設された時に、上で述べたように先生は国立国会図書館から赴任された。二人の転入と転出は入れ替わりになった。その後、1988年にセンターへ赴任したので、同僚として2年間過す機会に恵まれた。先生が創設され担当された大学院の比較高等教育研究の講座を放送教育開発センターへ転出された1990年以後に私が継承した。個人的には『大学教育とは何か』、『大学授業の研究』などのご編著に執筆させていただく中で薫陶を受けた。あの時点で大学教育に執着されて、授業や学生やFDに人一倍関心を持たれていたのを、現在は文科省大学間連携事業の一環としてアクティブ・ラーニング=能動的学修と関わるプロジェクトを責任者として推進しながら思い出すことが少なくない。アクティブ・ラーニング自体は、先生が先見的に研究された米国の伝統から生まれた概念であり、単位制、GDP、CAP、シラバス、FD、HIP、ルーブリックなどの概念とともに日本へ上陸したものである。先生はそうなる方向性を解読されていたに違いな

い。すでにその時点において『学生消費者の時代』や『大学評価とは何か』や『大学授業の研究』の上梓があるように、大学教育には種々の角度から終始強いご関心を持たれていたもので、ご健在であれば現在でも指導性を発揮されているに違いないし、21世紀後半のビジョンを提案されているに違いない。

センターでは、東千田町の旧図書館のあの狭隘で貧乏な時代に18年間にわたって、歴代センター長ともどもセンターを牽引された。「暮らしは低く、思いは高く」をモットーに研究や教育に大きな足跡を残され、発展の礎を築かれた。当時、センターの研究者は早朝から夜遅くまで研究に没頭していたので、先生だけがそうであったのではないかもしれないが、それでも夜を昼に継いで日本の高等教育の行く末を考えておられたことをひしひしと感じた。睡眠時間をあまりとられていないと観察したのは私だけではあるまい。ちなみに、その頃は、矢野、馬越、金子の各氏など錚々たる若手がおられ、森戸道路の反対側の総合科学部からはセンターの研究熱心さを驚異の眼差しで見られていたという神話のような実話があるくらいである。

喜多村先生はRIHE at Hiroshima Universityに執着され、大学の国際化に積極的に努められ、OECDやユネスコなどとの国際共同研究、さらに国際会議を再々開催された。多くの著名教授を招聘されるなど、センターの世界進出とネットワーク構築に陣頭指揮をとられた功績が大きい。

私は後にセンター長を拝命したときにささやかながら喜多村ドクトリンを踏襲した。1つは上述したatの継承である。それはセンターが学内の役に立たないという折り込み済みの批判を受けたが、敢えて伝統を堅持した。大学教育研究センターを高等教育研究開発センターに名称変更したのは残念であったが、「高等教育センター」を阻止して「研究開発センター」とした。英語名称のRIHEも堅持した。他の1つは、inbreedingの阻止である。センターのスタッフは国内外から任用することを原理とし、広島大学卒業生を半数以下に抑制することである。また、原則として助教から講師以上の職位への昇任は禁止することである。さらに、懸案であった世界的研究網の一角を形成することも、COEプログラムの採択などによって継承した精神である。教育に熱心な先生は学生をこよなく愛され叱咤激励されたが、この点の継承は先生ほど上首尾には行かなかったのではないかと反省している。しかし先生が礎石を敷かれないまま草創期にある大学院の講座で主査として4名の諸君に高等教育の博士号を授与できたのは私としては上出来であったと考えている。

今回想すると、先生のご恩に報いる機会を逸したのは残念である。1つは、センター長への就任であったが、東京へ転出希望を持たれた前後とかち合い、タイミングが合わなかった。2つは、日本高等教育学会会長への就任だが、これもご病気のため、タイミングが合わなかった。実は、それは表向きの話で、先生は会長に当確であったし、前会長が三顧の礼を尽くして懇願されたのに引き受けられなかった経緯がある。私ももう一期事務局長を務めますからと懇望したが無駄であった。先生の梃子でも動かない頑固な一面が窺われた。ご辞退の理由が何か皆目分からないために、表向きは病気で辞退されたとしか説明がつかなくなった次第であった。

かくして先生のご恩に報いる機会を逸したが、一つだけあるとすれば、名誉教授の称号を授与できたことである。この話は東京での追悼会に次いで二番煎じになって恐縮であるが、私ができた孝行はこれくらいしかないので話題にさせていただくことにしたい。名誉教授選考推薦を私が書いた

こともあるが、それよりも年数の制約を除去した点が重要である。部局長連絡会議において教授歴20年を15年にする論議があった際に、学内と学外の出身者を差別化する議案が提出された。その時に「外なる国際化を追求するならば同時に内なる国際化を実現すべきだ」と主張した私の提案が承認され、各学部に差し戻されて再議され最終的に、15年で学内外出身者を同等に扱うことで決着した経緯がある。その結果センターでは横尾先生と喜多村先生に名誉教授の資格ができ、両先生に冥途への土産ができたことは幸いであった。

## 5. おわりに

私が1976年にクラーク・カー、マーチン・トロウ両教授とUCBの高等教育研究センターにおいて昼食をご一緒した時にも、喜多村教授の世界的なご活躍の話で花が咲いた。これらの世界的なリーダーが逝去されたときには、多くの人々が悲しみを味わったことは記憶に新しい。喜多村先生が逝去されたとの悲報は世界の人々を悲嘆にくれさせたのであるが、私が直後に会ったウルリッヒ・タイヒラー教授やウィリアム・カミングス教授もとても残念だと在りし日の先生の面影を偲ばれていた。先生の学恩にあらためて感謝するとともに、謹んで心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。